

作況ニュース（第6号）

水 稲
大 豆

（発行：令和2年7月17日）（編集：令和2年7月16日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

草丈長く葉色濃い、適切な肥培管理を

- － ほ場を観察して、穂いもちの防除を－
- － 斑点米カメムシ類防除の徹底－

1 今後の気象の見通し

(1) 東北地方1か月予報（7月18日～8月17日）【令和2年7月16日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側では、期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、天気は数日の周期で変わってでしょう。

向こう1か月の日照時間は、東北日本海側で平年並または少ない確率ともに40%、東北太平洋側で少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目（7月18日～24日）は、東北日本海側で平年並の確率50%、東北太平洋側で平年並または低い確率ともに40%です。2週目（7月25日～31日）は、東北日本海側で平年並の確率50%、東北太平洋側で平年並または低い確率ともに40%です。3～4週目（8月1日～14日）は、平年並または高い確率ともに40%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 7月22日(水)14時

【季節予報】

http://www.jma.go.jp/jp/longfcst/102_00.htm

2 県内の概況

(1) 気象経過

【秋田地方気象台】

7月上旬： この期間、梅雨前線や湿った空気の影響により、雨や曇りの日が多かったが、一時的に高気圧に覆われて晴れた日もあった。

旬平均気温は、概ね平年並から高い。旬降水量は、平年並からかなり多い。旬間日照時間は、概ねかなり少ないから少ない。

[旬統計値 (秋田)]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級区分
7月上旬	22.4	+1.0	高い	66.0	88	平年並	22.7	49	かなり少ない

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほ (7月15日) の生育概況

各地域振興局による調査では、あきたこまち (63地点) は、草丈66.2cm (平年比105%)、茎数534本/m² (同101%)、葉数11.2葉 (平年差+0.2葉)、葉緑素計値43.8 (平年比105%) であった。平年に比べ、草丈は長く、茎数は並、葉数は並～多い、葉緑素計値は高くなっている。

ひとめぼれ (6地点) は、草丈66.8cm (平年比107%)、茎数558本/m² (同100%)、葉数11.2葉 (平年差+0.2葉)、葉緑素計値41.2 (平年比109%) となっている。

表-1 定点調査結果 (各地域振興局 : 7月15日)

品種	地区	草丈			m ² 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	64.6	108	103	584	100	105	11.1	-0.1	0.0	42.0	102	101
	中央	68.0	109	106	468	95	96	11.1	0.0	0.0	43.4	109	107
	県南	66.8	112	106	519	92	99	11.2	0.0	0.3	45.3	107	106
	全県	66.2	110	105	534	96	101	11.2	0.0	0.2	43.8	106	105
ひとめぼれ	中央	66.8	110	107	558	101	100	11.2	0.2	0.2	41.2	113	109

② 気象感応試験 (幼穂形成期) の生育概況 (あきたこまち)

農試 (標植) は、幼穂形成期 (2mm期) 7月7日 (平年差-2日)、草丈60.4cm (平年比104%)、茎数553本/m² (同98%)、葉数11.3葉 (平年差+0.3葉)、葉緑素計値43.3 (平年比105%) であった。時期別理想生育量との比較では、草丈、茎数は適値、葉数は上限より多く、葉緑素計値は適値、栄養診断値ではⅢ型 (理想) とⅣ型 (籾数やや多い) の間に該当する。

農試 (晩植) は、幼穂形成期 (同上) 7月12日 (平年差-3日)、草丈59.4cm (平年比99%)、茎数538本/m² (同110%)、葉数10.6葉 (平年差-0.5葉)、葉緑素計値44.6 (平年比105%) であった。時期別理想生育量との比較では、草丈、茎数、葉数は適値、葉緑素計値は高く、Ⅳ型 (籾数やや多い) に該当する。

表－2 気象感応試験(幼穂形成期)の生育概況

試験地	幼穂形成期	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
農試(標植)	7月7日	60.4	104	104	553	90	98	11.3	0.1	0.3	43.3	99	105
農試(晩植)	7月12日	59.4	104	99	538	103	110	10.6	-0.6	-0.5	44.6	105	105

注1. 移植日: 標植: 5月15日、晩植: 5月25日

注2. 調査日: 農試(標植)7/8、農試(晩植)7/10

注3. 平年値は、標植は平成12～令和元年、晩植は平成29～令和元年の平均値を用いた。

2) 直播栽培

①直播定点調査ほ(7月15日)の生育概況

全県の生育概況は、草丈58.4cm(平年比103%)、茎数614本/㎡(同97%)、茎数増加比7.7(平年差+0.5)、葉数10.2葉(同+0.2葉)、葉緑素計値44.0(平年比109%)であった。平年に比べ、草丈は長く、茎数は少なく、茎数増加比は高く、葉数は並、葉緑素計値は高くなっている。

表－3 定点調査結果(湛水直播: 品種 あきたこまち、農試、各地域振興局 7月15日)

設置場所	苗立数 本年 (本/㎡)	草 丈			㎡当たり茎数			茎数増加比			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年差	平年差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農 試	62	59.3	99	106	540	65	82	8.7	1.2	0.5	9.9	0.1	0.0	42.4	104	103
大館市	111	58.9	113	108	1001	156	156	9.1	4.6	2.1	10.2	0.5	0.4	44.8	117	113
井川町	81	58.5	92	101	523	78	87	6.5	0.1	0.2	10.9	0.4	0.8	45.2	122	114
美郷町	59	58.7	95	98	440	92	74	7.5	-0.3	-0.3	10.3	-0.3	-0.1	42.4	115	104
横手市	83	56.5	113	100	564	109	85	6.8	1.1	0.1	9.8	0.1	0.0	45.3	124	112
全 県	79	58.4	102	103	614	100	97	7.7	1.4	0.5	10.2	0.2	0.2	44.0	116	109
時期別 目標 生育量	上限	58	-	-	700	-	-	-	-	-	10.5	-	-	46	-	-
	目標	56	-	-	600	-	-	-	-	-	10.0	-	-	44	-	-
	下限	54	-	-	500	-	-	-	-	-	9.5	-	-	42	-	-

②農試直播作況ほ場の生育概況

7月15日の農試の調査結果では、草丈59.3cm(平年比106%)、茎数540本/㎡(同82%)、茎数増加比8.7(平年差+0.5)、葉数9.9葉(同±0葉)、葉緑素計値42.4(平年比103%)であった。平年に比べ草丈は長く、茎数は少なく、茎数増加比は高く、葉数は並、葉緑素計値は高くなっている。

表－4 農試直播作況ほ場の生育概況(あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種)

調査 月日	草 丈			㎡当たり茎数			茎数増加比			葉 数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年 比(%)	平年 比(%)	本年 (本)	前年 比(%)	平年 比(%)	本年	前年 差	平年 差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年 比(%)	平年 比(%)
7/15	59.3	99	106	540	65	82	8.7	1.2	0.5	9.9	0.1	±0	42.4	104	103

注1) 平年値: 過去10年間(H22～R1)の平均値

注2) 茎数増加比 = 茎数/苗立数

注3) 苗立数は6月10日で62本/㎡(平年比76%)

注4) 中干し期間: 6月29日～7月16日

(3) 病害虫の発生概況

1) 葉いもち

巡回調査（7月2半旬）における葉いもちの発病地点率は17.9%（平年21.2%）、1調査単位当たりの集中分布数は0.04個（平年0.06個）でいずれも平年並だったが、7月1日以降断続的に、BLASTAM法において感染好適な気象が観測されており、今後の気象によっては発病が増加すると予想される。

2) 斑点米カメムシ類

抽出ほ場調査（7月3半旬）における畦畔のすくい取り調査では、アカスジカスミカメのすくい取り数は1.5頭（平年2.8頭）、発生地点率は25.0%（平年22.9%）でいずれも平年並だった。アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は2.3頭（平年2.7頭）で平年並、発生地点率は45.0%（平年34.3%）でやや高かった。水田内雑草調査ではノビエの密度は低く、地点率はやや低い。ホタルイ類の密度、地点率はいずれもやや低かった。

3 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

農試気象感応試験におけるあきたこまちの幼穂形成期は平年より2～3日早く、葉数の進みが早い。全県でも葉数の進みは早く、草丈が長い。一方で茎数が不足し、葉色の高い地点が見られる。また、7月上旬からの気象経過により幼穂形成期までの中干しは不十分な地点が多いと思われる。これからの時期は、作柄を確保する上で重要な時期であり、気象情報に注意するとともにほ場の状況を確認して追肥やきめ細かい水管理、病害虫防除の徹底に努める。

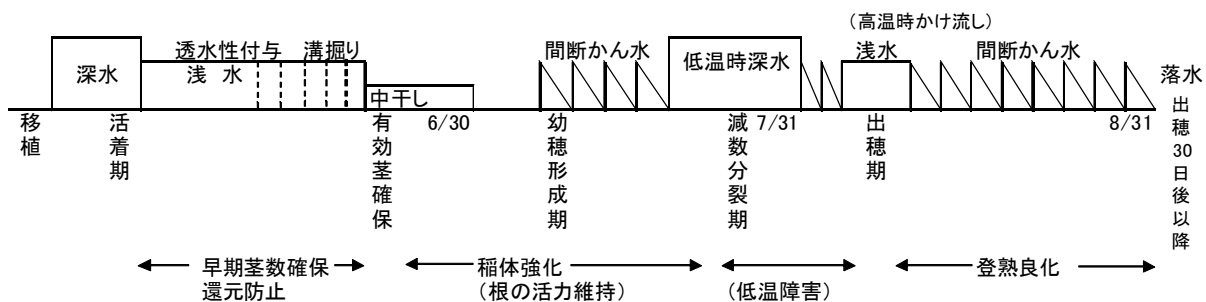
(1) 気象変化に対応した水管理

幼穂形成期から出穂までの水管理は稲体の活力維持のため間断かん水が基本となる。中干しを十分に行えなかったほ場では、反復落水管理（穂ばらみ期や登熟初期の1週間程度の落水）を実施し、土壌硬度を保つようにする。

減数分裂期は、葉耳間長±0cmの主茎が半分以上見られる頃で、出穂期前10～12日頃である。稲は、この時期が最も低温に弱く、日平均気温が20℃以下（最低気温17℃以下）では障害不稔が発生するおそれがあるので、低温時は深水管理（15cm以上）を行い幼穂を保護する。なお、用水の水温が気温より低い場合は逆効果になるので注意が必要である。

出穂の時期は稲が水を多く必要とするので、出穂したら10日間は湛水状態にして水を切らさないように管理する。

その後は、間断かん水を基本とするが、気温が30℃以上になる場合は、かけ流しを行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。また、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消費を軽減する。（資料編p.23、稲作指導指針p.71～78参照）



(2) 生育・栄養診断に基づいた穂肥（資料編p. 19、21～23参照）

発育モデルによる本年の生育予測では、秋田市で中苗あきたこまちを5月20日頃に移植した場合の減数分裂期は、7月23日頃の予測となっている。

減数分裂期の追肥が必要か否かは、幼穂形成期に実施した栄養診断結果に基づいて判断する。

幼穂形成期の生育・栄養診断でⅠ～Ⅳ型の生育型に該当した場合は、減数分裂期に窒素成分で2 kg/10a追肥する。ただし、減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合は、早めに追肥する。Ⅴ型の生育型に該当する場合は、ムラ直し程度に窒素成分で1 kg/10a追肥する。

なお、玄米のタンパク質含有率を高めないために、過剰な追肥や減数分裂期を過ぎからの追肥は行わない

(3) あきたこまちの出穂期の予測

7月16日以降の気温が平年並で経過した場合、中苗あきたこまちの出穂期は、次のとおり予測される。予測日を目安にして、追肥や病虫害防除等の栽培管理を適期に実施する（資料編p. 20参照）。

表－5 あきたこまちの出穂期予測

中苗：あきたこまち	減数分裂期	出穂期
県北部（大館市：移植時期5月15日）	7月26日頃	8月4日頃
県中央部（秋田市：移植時期5月20日）	7月25日頃	8月3日頃
県南部（横手市：移植時期5月25日）	7月27日頃	8月5日頃

(4) 斑点米カメムシ類防除

1) 雑草管理

- ① 農道・畦畔、休耕田・法面等の草刈りはイネの出穂15～10日前（平年7月20～25日頃）までに地域一斉に行い、斑点米カメムシ類の密度抑制に努める。
- ② 出穂期10日後頃の茎葉散布剤の散布当日から散布7日後までに農道・畦畔の草刈りを実施し、増殖源となるイネ科雑草の除去に努める。

2) 薬剤散布

- ① 出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布を行う。薬剤は畦畔を含めたほ場全体に散布する。

- ② 水田雑草があるほ場または牧草地や休耕田等の発生源に隣接しているほ場では、出穂期10日後頃に加えて同24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤の茎葉散布を行う。

(5) 穂いもち防除

1) 薬剤散布

- ① 育苗施設内外の衛生管理や、適正な育苗期いもち防除、及び葉いもち防除を広域的に実施した場合は、穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～7日後にトライフロアブル剤またはラブサイド剤の茎葉散布を行う。
- ② 葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤、またはゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤の散布を行うか、出穂直前と穂揃期にトライフロアブル剤、ラブサイド剤、ビーム剤のいずれかの茎葉散布を行う。
- ③ 葉いもちが多発しているほ場では、上述の②に加え、さらに、傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。
- ④ 薬剤の使用に当たっては、テブフロキン剤（トライ剤）の総使用回数は2回以内、フサライド剤（ラブサイド剤）の総使用回数は3回以内、トリシクラゾール剤（ビーム剤）の本田での総使用回数は3回以内なので注意する。

(6) 紋枯病防除

- ① 前年多発したほ場に限り、出穂20～10日前にモンガリット粒剤、または出穂15～5日前にリンバー粒剤を散布する。
- ② 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、茎葉散布剤を株元に到達するように散布する。出穂前の防除が効果的だが、多発が予想される場合は出穂以降にも散布する（令和2年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準（以下、「防除基準」という。）p. 29～30を参照）。

(7) カドミウム含有米の発生防止対策

カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、出穂前後各3週間、常時、湛水管理とするよう徹底する（資料編p. 24～25参照）。

(8) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- 1) 農薬散布時は、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。
- 2) 散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。
- 3) 健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。
- 4) 農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実にを行う。
- 5) 防除履歴を必ず記録する。

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主な指導事項
7月下旬 ～ 8月中旬	生育・栄養診断の実施	<ul style="list-style-type: none"> ○移植栽培では、ほ場毎に栄養診断結果に基づき追肥の量を決定する。 ○減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合は、早めに追肥する。 ○過剰な追肥や減数分裂期を過ぎてからの追肥は、食味低下を招くため行わない。
	水管理 (気象変化に対応した水管理)	<ul style="list-style-type: none"> ○幼穂形成期から出穂までは間断かん水とする。出穂したら10日間は湛水状態で管理し、その後は再び間断かん水とする。 ○7月下旬(減数分裂期)は低温に弱いので、低温時(日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下)には深水管理(15cm以上)を徹底する。 ○出穂後に気温が30℃以上になる日は、かけ流しかん水を行う。
	斑点米カメムシ類の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○イネの出穂15～10日前までに農道・畦畔の草刈りを行い、斑点米カメムシ類の密度抑制に努める。 ○出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを行い、増殖源の除去に努める。 ○出穂期10日後頃にアルバリン剤/スタークル剤の茎葉散布剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。 ○水田雑草があるほ場、または牧草地や休耕田等の発生源に隣接しているほ場では、1回目の防除に加えて出穂期24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤の茎葉散布剤を用いて防除する。
	穂いもちの防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ほ場の検診を行い、葉いもちの発病状況に応じて穂いもち防除を実施する。
	紋枯病の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○前年多発したほ場に限り、出穂20～10日前にモンガリット粒剤、または出穂15～5日前にリンバー粒剤を散布する。 ○穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。
	カドミウム含有米の発生防止対策	<ul style="list-style-type: none"> ○カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、出穂前後各3週間は湛水管理とする。
	農薬飛散防止と安全使用	<ul style="list-style-type: none"> ○農薬散布時は、特に周辺作物への飛散防止対策を徹底する。 ○散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。 ○健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。 ○農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実にを行う。 ○防除履歴を必ず記録する。

大豆

雑草対策と排水対策の徹底

- ほ場を観察して病害虫の適期防除 -
- 計画的な培土の実施を -

1 リュウホウの生育概況（農業試験場 作況調査試験）

6月1日播種の7月10日現在の生育は、草丈54.4cm（平年比164%）、主茎節数9.0節（平年差+2.9節）、分枝数0本（同±0本）であった。

6月19日播種の7月10日現在の生育は、草丈23.3cm（平年比110%）、主茎節数4.0節（平年差+0.6節）であった。

表-1 農業試験場におけるリュウホウの生育概況

調査日	播種日	草丈(cm)			主茎節数(節)			分枝数(本)		
		本年	前年比(%)	平年比(%)	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
7/10	6/1	54.4	166	164	9.0	+2.9	+2.9	0	0	±0
	6/19	23.3	138	110	4.0	+0.9	+0.6	0	0	±0

1) 平年値は6月1日播種は平成26～令和元年、6月19日播種は平成22～令和元年

2) 生育データはデントコーン-小麦-大豆の輪作畑における慣行栽培による

2 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

(1) 最終培土

培土は、倒伏軽減や雑草防除の観点からも重要な作業であるが、最終培土の時期が遅れると畦間の耕起・攪拌に伴う断根や、管理作業機の接触に伴う茎葉損傷により生育への悪影響のおそれがあるため、培土は開花の10日前には終了する。

表-2に秋田県の大豆奨励（認定）品種の開花期（平年値）を示す。本年は生育が進んでおり、平年値よりも開花期が早まると考えられるため、計画的に培土作業を行う。

表-2 秋田県の大豆奨励（認定）品種の開花期の平年値

播種期	品種	リュウホウ	秋試緑1号	あきたみどり
5月25日		7月23日	7月23日	7月26日
6月5日		7月30日	-	-
6月20日		8月5日	-	-

※秋田農試の大豆奨励品種決定調査における平均値

5月25日は過去10年間の平均値（リュウホウはH20～H29年、その他はH19～H28年）、

6月5日播種は過去8年間の平均値（H24～R1年）、

6月20日播種は過去10年間の平均値（H22～R1年）

(2) 排水対策の徹底

降雨による停滞水が速やかに排水されるよう、明きよの点検や補修を随時行う（令和2年6月30日発行の作況ニュース第4号を参照）。

(3) 病虫害防除

今後の気象に注意し、ほ場の観察による病虫害の早期発見、防除に努める（防除基準p.50～56を参照）。

- 1) 食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類、ウコンノメイガ等）やアブラムシ類は、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じて防除する。
- 2) ウコンノメイガは、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査し、茎当たりの葉巻数が1.3個以上確認された場合は、8月上旬までに防除する。
- 3) ダイズサヤタマバエは、播種期が遅いほ場ほど被害が大きくなる傾向があるため、必要に応じて着莢期に防除する。
- 4) 排水対策を徹底して黒根腐病や茎疫病の発生を防ぐ。また、罹病株は早期に抜き取り処分し、病害の拡大を抑制する。
- 5) 紫斑病は開花期20～30日後に防除する。また、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

(4) 雑草対策

6月6半旬から降雨日が多いことから、全県的に培土作業が遅れ、残草しているほ場が見られる。

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合は、手取りまたは大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行う。大豆生育期処理除草剤は、薬剤によって使用時期等が異なるため使用基準を遵守し、適期に防除する（防除基準p.334～338を参照）。

1) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草

ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルを使用する。

2) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草

大豆バサグラン液剤を使用する。ただし、適用品種はリュウホウに限る。

なお、大豆バサグラン液剤は、高温時や日射が強い場合、湿害等による生育不良のほ場で薬害が助長されることがあるため、散布日の天候や生育を考慮して散布する。

3) 大型化する雑草（上記雑草）や防除の難しい雑草（シロザ・エノキグサ・ツユクサ・イヌホオズキ・帰化アサガオ類等）

バスタ液剤による畦間・株間処理またはザクサ液剤、ラウンドアップマックスロードによる畦間処理を行う。また、帰化アサガオ類やアレチウリに対してはバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する。なお、バスタ液剤とザクサ液剤の成分は同一成分として総使用回数に数えるので注意する。

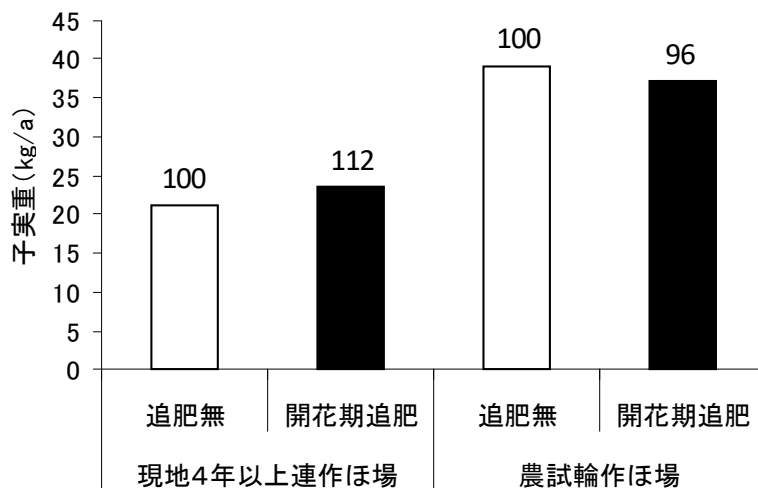
畦間・株間処理にあたっては、薬液付着に伴う薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーや専用ノズルを必ず使用する。

(5) 開花期追肥

水田転換初年目畑や地力の高いほ場では必要ないが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場（土壌や根粒からの窒素供給力の低下が著しいほ場）や湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥効果が認められている（図－1）。

追肥は、開花期（開花期～開花後10日頃）に硫安または尿素を用い、窒素成分で10a当たり5～10kg施用する。

（大豆指導指針（平成30年3月発行）p.24～26、57を参照）



図－1 開花期追肥が子実重に及ぼす影響（平成14年秋田農試）

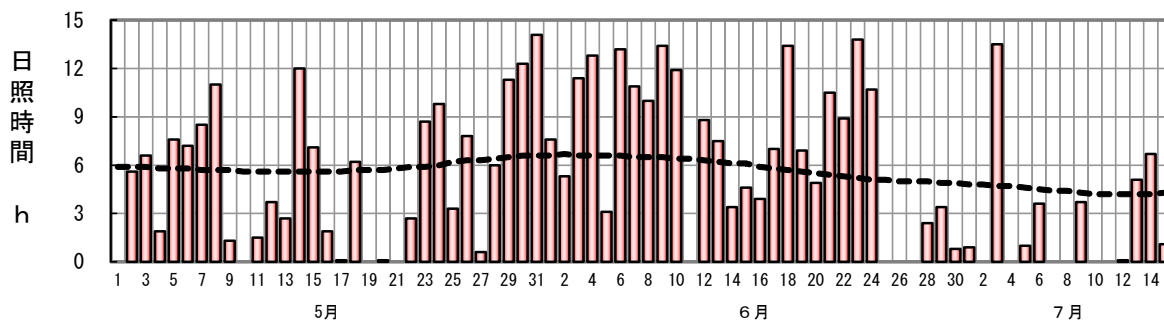
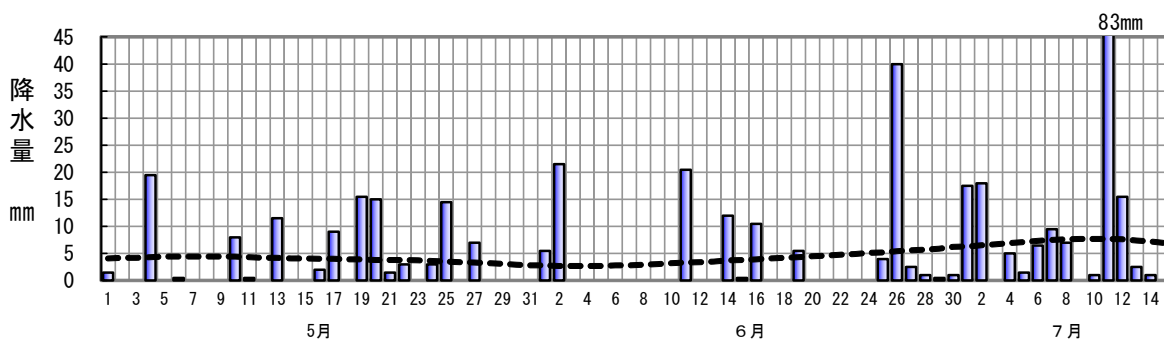
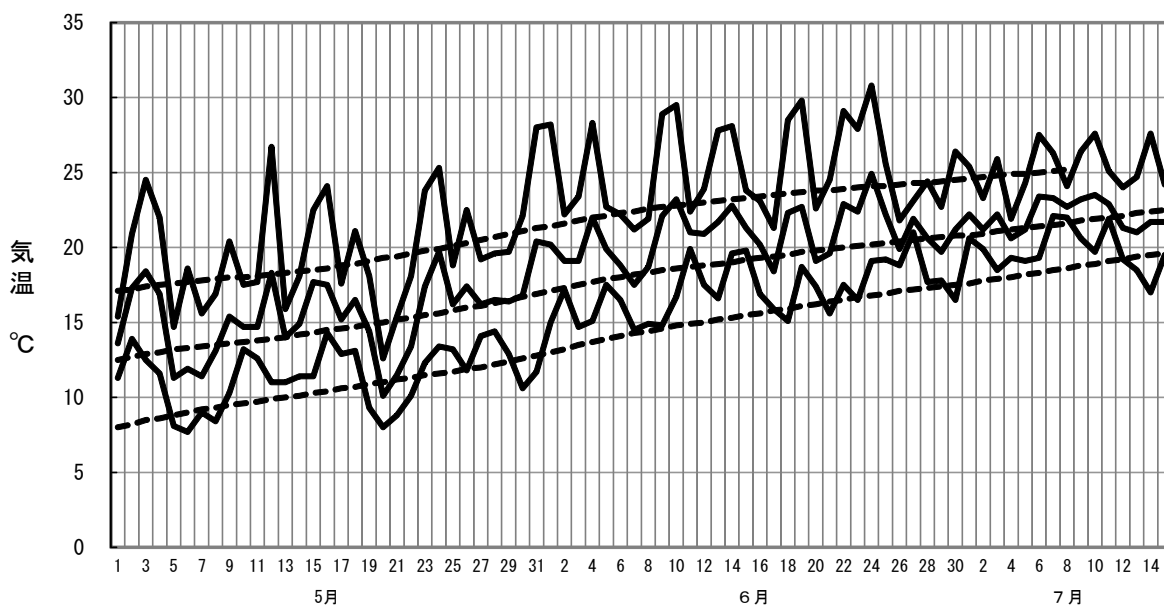
- 1) 追肥無は基肥N0.25、P₂O₅・K₂O各0.75kg/a
- 2) 開花期追肥は基肥に加え大豆開花期にN1.0kg/a追肥した
- 3) 図中の数字は慣行の子実重を100とした場合の指数

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和2年5月1日から7月15日の気象経過図（観測地点：秋田地方気象台）

（資料 秋田地方気象台）



(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(資料 秋田地方気象台)

項目	時期	7月上旬	
		本年	平年比較
平均気温(°C)		22.4	+1.0
降水量(mm)		66.0	88%
日照時間(hr)		22.7	49%

2 定点調査結果 (各地域振興局調査 7月15日)

表-1 定点調査結果 (品種: あきたこまち)

地域振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	61.1	110	98	670	106	116	11.1	0.3	0.1	41.9	100	100
北秋田	9	64.9	107	102	575	102	100	11.1	-0.4	-0.1	42.0	102	104
山本	9	66.3	107	105	544	93	105	11.1	0.0	0.1	42.1	103	100
秋田	9	68.9	107	106	466	96	95	11.2	-0.1	0.0	43.0	107	107
由利	2	64.0	121	109	479	94	100	10.7	0.1	0.2	45.4	115	109
仙北	10	64.8	108	103	480	80	91	11.2	-0.1	0.3	42.7	108	104
平鹿	11	67.3	114	106	526	98	102	11.0	0.0	0.1	46.7	107	108
雄勝	8	68.6	114	109	557	99	107	11.5	0.1	0.5	46.6	104	107
全県平均	63	66.2	110	105	534	96	101	11.2	0.0	0.2	43.8	106	105
7月15日の各地域の理想生育量													
		草丈(cm)			㎡当たり茎数(本)			葉数(葉)			葉緑素計値		
		県北	中央	県南	県北	中央	県南	県北	中央	県南	県北	中央	県南
上限		62	63	64	586	559	484	11.0	10.9	11.0	42	44	43
目標		60	61	62	552	515	463	10.8	10.7	10.9	40	42	42
下限		57	58	60	519	471	443	10.6	10.5	10.7	39	40	41

表-2 定点調査結果 (品種: ひとめぼれ)

地域振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	64.6	111	106	568	94	100	11.2	0.5	0.3	40.6	109	104
由利	4	67.9	110	108	554	106	100	11.2	0.1	0.1	41.5	115	112
中央地区平均	6	66.8	110	107	558	101	100	11.2	0.2	0.2	41.2	113	109

表-3 定点調査結果 (湛水直播 品種: あきたこまち)

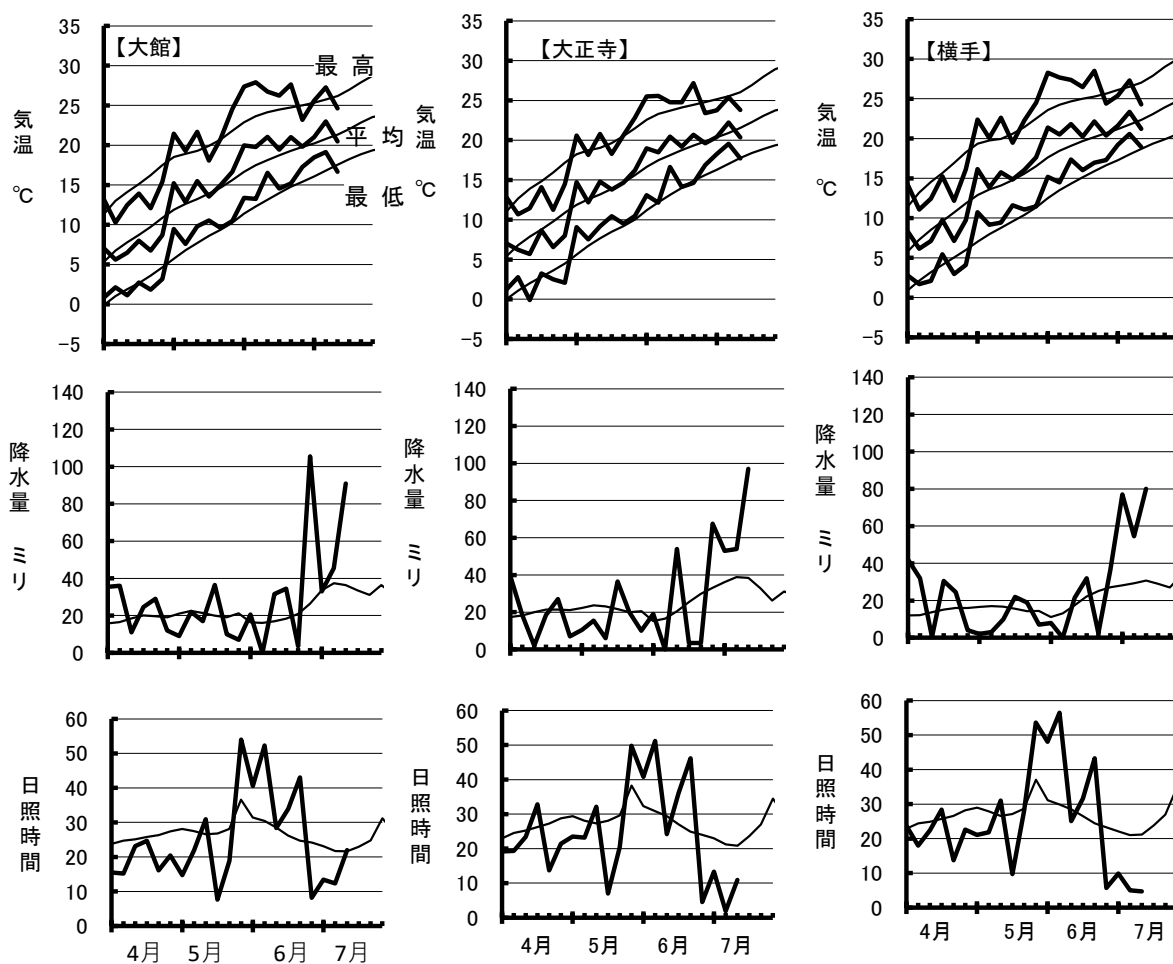
設置場所	苗立数 (本/㎡)	草丈				㎡当たり茎数			茎数増加比			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年差	平年差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)	
農試	62	59.3	99	106	540	65	82	8.7	1.2	0.5	9.9	0.1	0.0	42.4	104	103	
大館市	111	58.9	113	108	1001	156	156	9.1	4.6	2.1	10.2	0.5	0.4	44.8	117	113	
井川町	81	58.5	92	101	523	78	87	6.5	0.1	0.2	10.9	0.4	0.8	45.2	122	114	
美郷町	59	58.7	95	98	440	92	74	7.5	-0.3	-0.3	10.3	-0.3	-0.1	42.4	115	104	
横手市	83	56.5	113	100	564	109	85	6.8	1.1	0.1	9.8	0.1	0.0	45.3	124	112	
全県	79	58.4	102	103	614	100	97	7.7	1.4	0.5	10.2	0.2	0.2	44.0	116	109	
時期別 目標 生育量	上限	58	-	-	700	-	-	-	-	-	10.5	-	-	46	-	-	
	目標	56	-	-	600	-	-	-	-	-	10.0	-	-	44	-	-	
	下限	54	-	-	500	-	-	-	-	-	9.5	-	-	42	-	-	

3 関連成績

(1) 気象感応試験

1) 稲作期間の気象（7月1半旬～3半旬）

7月1～2半旬は最高気温は平年並から低く、最低気温、平均気温は高く、3半旬は最高気温、平均気温は低く、最低気温は並だった。降水量はかなり多かった。日照時間は大館の3半旬を除いてかなり少なかった。



図－1 令和2年の稲作期間中の気象経過（アメダス半旬別データ）

2) 幼穂形成期の生育概況（あきたこまち）

農試（標植）は、幼穂形成期（2mm期）7月7日（平年差－2日）、草丈60.4cm（平年比104%）、茎数553本/m²（同98%）、葉数11.3葉（平年差+0.3葉）、葉緑素計値43.3（平年比105%）であった。時期別理想生育量との比較では、草丈、茎数は適値、葉数は上限より多く、葉緑素計値は適値、栄養診断値ではⅢ型（理想）とⅣ型（籾数やや多い）の間に該当する。

農試（晩植）は、幼穂形成期（同上）7月12日（平年差－3日）、草丈59.4cm（平年比99%）、茎数538本/m²（同110%）、葉数10.6葉（平年差－0.5葉）、葉緑素計値44.6（平年比105%）であった。時期別理想生育量との比較では、草丈、茎数、葉数は適値、葉緑素計値は高く、栄養診断値ではⅣ型（籾数やや多い）に該当する。

幼穂形成期の乾物重は、農試（標植）285g/m²（同92%）、農試（晩植）264g/m²（平年比94%）で、平年に比べ少ない。

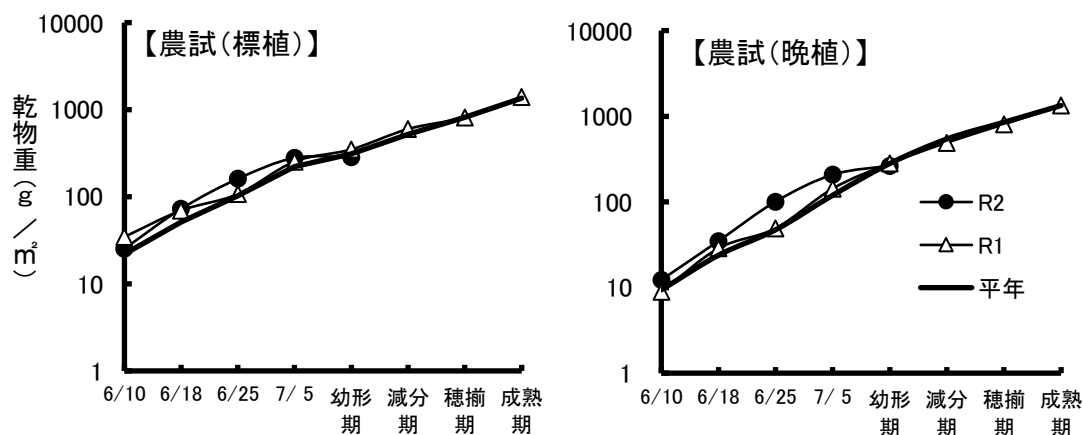
表－4 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況

試験地	幼穂形成期	草丈			m ² 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
農試(標植)	7月7日	60.4	104	104	553	90	98	11.3	0.1	0.3	43.3	99	105
農試(晩植)	7月12日	59.4	104	99	538	103	110	10.6	-0.6	-0.5	44.6	105	105

注1. 移植日: 標植: 5月15日、晩植: 5月25日

注2. 調査日: 農試(標植)7/8、農試(晩植)7/10

注3. 平年値は、標植は平成12～令和元年、晩植は平成29～令和元年の平均値を用いた。



図－2 乾物重の推移（気象感応試験）

3) 農業試験場の出葉状況

7月の気温が平年並～高く、農試（標植）は、出葉期は平年より早い。12葉期は前年より2日、平年より5日早い7月7日で、13葉期は前年より2日、平年より3日早い7月16日であった。

農試（晩植）は、11葉期が7月5日、12葉期が7月15日で、平年並であった。

表－5 出葉期の平年比較（気象感応試験）

品種	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
あきたこまち (標植)	R2	5/23	5/28	6/2	6/8	6/12	6/18	6/27	7/7	7/16
	R1	5/20	5/24	5/29	6/4	6/11	6/19	6/27	7/9	7/18
	平年	5/24	5/30	6/5	6/11	6/17	6/23	7/2	7/12	7/19
	平年差	-1	-2	-3	-3	-5	-5	-5	-5	-3
あきたこまち (晩植)	R2	6/1	6/5	6/10	6/15	6/20	6/26	7/5	7/15	—
	R1	5/29	6/3	6/7	6/13	6/20	6/24	7/1	7/10	7/19
	平年	5/30	6/5	6/11	6/17	6/23	6/29	7/6	7/14	7/22
	平年差	2	0	-1	-2	-3	-3	-1	1	—

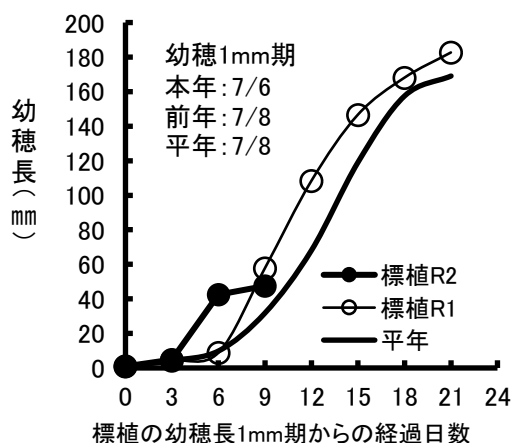
注：標植の平年値は、平成12～令和元年までの平均。晩植の平年値は、平成29～令和元年までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.5葉。

R2年の移植日と移植時葉数は標植5月15日、3.7葉、晩植5月25日、3.4葉

4) 幼穂長の伸長状況

農試（標植）における幼穂長は、幼穂長1mm期から3日目まで4mm、6日目で42.5mmであった。9日目で47.5mmに達し、前年よりやや短く、平年より長くなった。



図－3 幼穂長の平年比較

5) 土壤残存窒素量 (農試 (標植) : 7月9日、農試 (晩植) : 7月12日)

土壤残存窒素量は農試 (標植) 0.14mg/100g、農試 (晩植) は0.41mg/100gで平年に比べ低くなった。

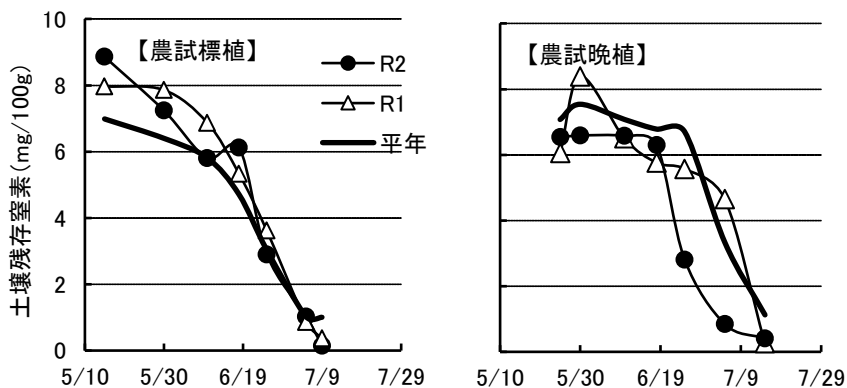


図-4 土壤残存窒素量の消長

注) 移植日: 農試 (標植) 5月15日、農試 (晩植) 5月25日 基肥量: N 0.7kg/a

平年値: 農試 (標植) は平成12~令和元年、農試 (晩植) は平成29~令和元年の平均値

(2) 直播作況試験

1) 生育概況

7月15日の農試の調査結果では、草丈59.3cm (平年比106%)、茎数540本/m² (同82%)、茎数増加比8.7 (平年差+0.5)、葉数9.9葉 (同±0葉)、葉緑素計値42.4 (平年比103%)であった。平年に比べ草丈は長く、茎数は少なく、茎数増加比は高く、葉数は平年並、葉緑素計値は高くなっている。

表-6 農試直播作況ほ場の生育概況 (あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種)

調査 月日	草 丈			㎡当たり茎数			茎数増加比			葉 数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年 比(%)	平年 比(%)	本年 (本)	前年 比(%)	平年 比(%)	本年 差	前年 差	平年 差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 比(%)	前年 比(%)	平年 比(%)
7/15	59.3	99	106	540	65	82	8.7	1.2	0.5	9.9	0.1	±0	42.4	104	103

注1) 平年値: 過去10年間(H22~R1)の平均値

注2) 茎数増加比 = 茎数/苗立数

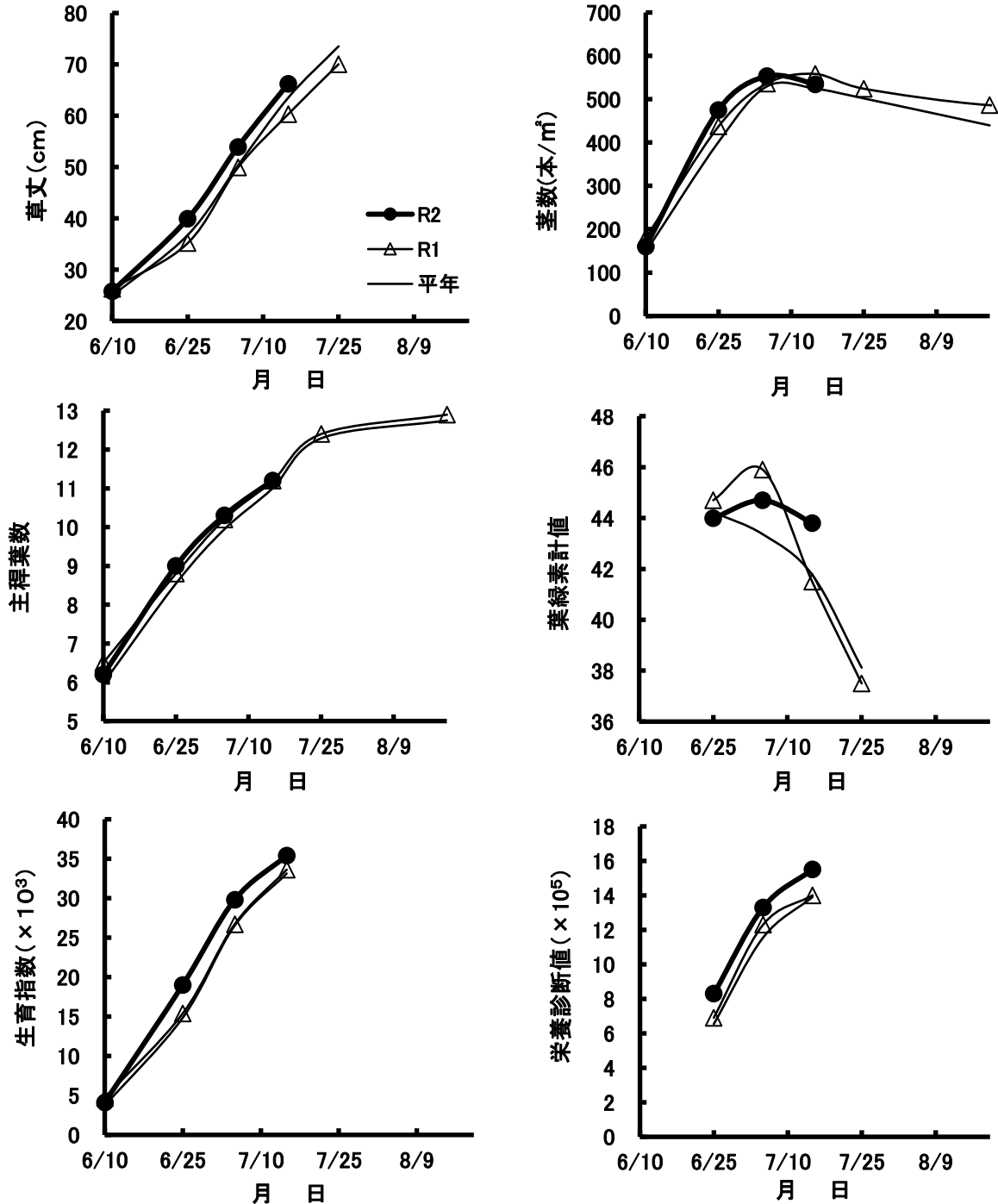
注3) 苗立数は6月10日で62本/m² (平年比76%)

注4) 中干し期間: 6月29日~7月16日

4 今後の生育の見通しと栽培管理

(1) 本年の水稲生育の特徴（各地域振興局定点調査結果）

本年の水稲の生育は、平年に比べ、草丈は長く、茎数は並、葉数は多く、葉緑素計値は高い。土壌の硬さを保ちつつ間断かん水を基本とした水管理を実施するとともに、減数分裂期の追肥を生育・栄養診断によって判断する。



図一 5 各地域振興局定点調査（7月15日）結果（あきたこまち、全県平均）

生育指数 = 草丈(cm) × 茎数(本/m²)

栄養診断値 = 草丈(cm) × 茎数(本/m²) × 葉緑素計値

(2) 減数分裂期の予測 (あきたこまち)

減数分裂期は概ね平年並、地域によりやや早い予測になっている。

表-7 発育モデルによるあきたこまちの減数分裂期の予測

アメダス 地点	移植時期 5月	稚苗			中苗		
		7月17日以降の気温経過(平年気温に対する差)					
		±0℃	+2℃	-2℃	±0℃	+2℃	-2℃
鹿角	10日	7月30日	7月29日	8月1日	7月28日	7月27日	7月30日
	15日	8月2日	8月1日	8月4日	7月31日	7月29日	8月1日
	20日	8月4日	8月2日	8月6日	8月1日	7月30日	8月3日
	25日	8月7日	8月5日	8月9日	8月3日	8月1日	8月6日
大館	10日	7月26日	7月25日	7月27日	7月23日	7月23日	7月24日
	15日	7月29日	7月28日	7月31日	7月26日	7月25日	7月27日
	20日	8月1日	7月30日	8月2日	7月28日	7月27日	7月30日
	25日	8月3日	8月2日	8月5日	7月30日	7月29日	8月1日
鷹巣	10日	7月27日	7月26日	7月28日	7月24日	7月23日	7月25日
	15日	7月30日	7月28日	7月31日	7月26日	7月25日	7月28日
	20日	8月1日	7月30日	8月3日	7月28日	7月27日	7月30日
	25日	8月4日	8月2日	8月6日	7月31日	7月29日	8月2日
能代	10日	7月26日	7月25日	7月27日	7月23日	7月22日	7月24日
	15日	7月29日	7月28日	7月30日	7月26日	7月25日	7月27日
	20日	7月31日	7月30日	8月2日	7月28日	7月26日	7月29日
	25日	8月3日	8月1日	8月5日	7月30日	7月29日	8月1日
大潟	15日	7月28日	7月27日	7月29日	7月25日	7月24日	7月26日
	20日	7月30日	7月29日	8月1日	7月27日	7月26日	8月28日
	25日	8月2日	8月1日	8月4日	7月29日	7月28日	7月31日
	30日	8月5日	8月3日	8月7日	8月1日	7月30日	8月3日
秋田	10日	7月23日	7月23日	7月24日	7月20日	7月20日	7月21日
	15日	7月26日	7月25日	7月27日	7月23日	7月22日	7月24日
	20日	7月29日	7月28日	7月30日	7月25日	7月24日	7月26日
	25日	8月1日	7月30日	8月2日	7月28日	7月27日	7月29日
大正寺	10日	7月28日	7月27日	7月29日	7月25日	7月24日	7月26日
	15日	7月30日	7月29日	8月1日	7月27日	7月26日	7月29日
	20日	8月2日	7月31日	8月4日	7月30日	7月28日	7月31日
	25日	8月5日	8月3日	8月7日	8月1日	7月30日	8月3日
本荘	10日	7月24日	7月23日	7月25日	7月21日	7月20日	7月21日
	15日	7月27日	7月26日	7月28日	7月24日	7月23日	7月25日
	20日	7月30日	7月28日	7月31日	7月26日	7月25日	7月27日
	25日	8月1日	7月31日	8月3日	7月29日	7月27日	7月30日
大曲	15日	7月27日	7月26日	7月28日	7月23日	7月22日	7月24日
	20日	7月29日	7月28日	7月31日	7月25日	7月25日	7月27日
	25日	8月1日	7月31日	8月3日	7月28日	7月27日	7月30日
	30日	8月4日	7月3日	8月6日	7月31日	7月30日	8月2日
角館	15日	7月27日	7月27日	7月29日	7月27日	7月24日	7月26日
	20日	7月29日	7月29日	8月1日	7月29日	7月26日	7月28日
	25日	8月1日	8月1日	8月4日	8月1日	7月28日	7月31日
	30日	8月4日	8月4日	8月7日	7月22日	7月31日	8月3日
横手	15日	7月28日	7月25日	7月27日	7月27日	7月22日	7月23日
	20日	7月31日	7月27日	7月30日	7月30日	7月24日	7月26日
	25日	8月2日	7月30日	8月2日	8月2日	7月26日	7月29日
	30日	8月5日	8月2日	8月5日	8月5日	7月29日	8月1日
湯沢	15日	7月26日	7月27日	7月29日	7月29日	7月24日	7月26日
	20日	7月29日	7月29日	8月1日	8月1日	7月26日	7月28日
	25日	7月31日	8月1日	8月4日	8月4日	7月28日	7月31日
	30日	8月3日	8月4日	8月8日	8月8日	7月31日	8月3日

注) 日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(3) 出穂期の予測（あきたこまち）

出穂期は概ね平年並、地域によりやや早い予測になっている。

表－8 発育モデルによるあきたこまちの出穂期の予測

アメダス 地点	移植時期 5月	稚苗			中苗		
		7月17日以降の気温経過(平年気温に対する差)					
		±0℃	+2℃	-2℃	±0℃	+2℃	-2℃
鹿角	10日	8月10日	8月8日	8月13日	8月7日	8月4日	8月10日
	15日	8月13日	8月10日	8月16日	8月9日	8月6日	8月12日
	20日	8月15日	8月12日	8月18日	8月11日	8月8日	8月14日
	25日	8月17日	8月14日	8月21日	8月13日	8月10日	8月17日
大館	10日	8月6日	8月4日	8月8日	8月2日	7月31日	8月4日
	15日	8月9日	8月6日	8月11日	8月4日	8月2日	8月7日
	20日	8月11日	8月9日	8月14日	8月7日	8月4日	8月9日
	25日	8月14日	8月11日	8月17日	8月9日	8月6日	8月12日
鷹巣	10日	8月6日	8月4日	8月8日	8月2日	8月1日	8月4日
	15日	8月9日	8月7日	8月11日	8月5日	8月3日	8月7日
	20日	8月11日	8月9日	8月14日	8月7日	8月4日	8月9日
	25日	8月14日	8月11日	8月17日	8月9日	8月7日	8月12日
能代	10日	8月5日	8月3日	8月7日	8月1日	7月31日	8月3日
	15日	8月8日	8月6日	8月10日	8月4日	8月2日	8月6日
	20日	8月10日	8月8日	8月13日	8月6日	8月4日	8月8日
	25日	8月13日	8月10日	8月16日	8月8日	8月6日	8月11日
大湯	15日	8月7日	8月5日	8月10日	8月3日	8月1日	8月5日
	20日	8月10日	8月7日	8月12日	8月5日	8月3日	8月8日
	25日	8月12日	8月10日	8月15日	8月7日	8月5日	8月10日
	30日	8月15日	8月13日	8月19日	8月10日	8月8日	8月13日
秋田	10日	8月2日	8月1日	8月4日	7月29日	7月28日	7月31日
	15日	8月5日	8月3日	8月7日	8月1日	7月30日	8月3日
	20日	8月8日	8月6日	8月10日	8月3日	8月1日	8月5日
	25日	8月10日	8月8日	8月13日	8月5日	8月4日	8月8日
大正寺	10日	8月7日	8月5日	8月9日	8月3日	8月2日	8月6日
	15日	8月10日	8月7日	8月12日	8月6日	8月4日	8月8日
	20日	8月12日	8月10日	8月15日	8月8日	8月6日	8月11日
	25日	8月15日	8月12日	8月18日	8月10日	8月8日	8月13日
本荘	10日	8月3日	8月2日	8月5日	7月30日	7月29日	8月1日
	15日	8月6日	8月4日	8月8日	8月2日	7月31日	8月4日
	20日	8月9日	8月7日	8月11日	8月4日	8月2日	8月6日
	25日	8月11日	8月9日	8月14日	8月6日	8月4日	8月9日
大曲	15日	8月6日	8月4日	8月8日	8月1日	7月31日	8月3日
	20日	8月8日	8月6日	8月11日	8月4日	8月2日	8月6日
	25日	8月11日	8月9日	8月14日	8月6日	8月4日	8月9日
	30日	8月14日	8月12日	8月17日	8月9日	8月7日	8月12日
角館	15日	8月7日	8月5日	8月9日	8月3日	8月1日	8月5日
	20日	8月9日	8月7日	8月12日	8月5日	8月3日	8月7日
	25日	8月12日	8月10日	8月15日	8月7日	8月5日	8月10日
	30日	8月15日	8月13日	8月19日	8月10日	8月8日	8月13日
横手	15日	8月5日	8月3日	8月7日	7月31日	7月30日	8月2日
	20日	8月7日	8月5日	8月10日	8月3日	8月1日	8月5日
	25日	8月10日	8月8日	8月13日	8月5日	8月3日	8月8日
	30日	8月13日	8月11日	8月16日	8月8日	8月6日	8月11日
湯沢	15日	8月7日	8月5日	8月10日	8月3日	8月1日	8月5日
	20日	8月10日	8月7日	8月12日	8月5日	8月3日	8月8日
	25日	8月12日	8月10日	8月15日	8月8日	8月5日	8月10日
	30日	8月16日	8月13日	8月19日	8月10日	8月8日	8月14日

注) 日平均気温は7月15日までアメダス観測地のデータ、16日以降平年値を用いた。

(4) あきたこまちの幼穂形成期における生育・栄養診断

1) 幼穂形成期における栄養診断

7月15日の各地域振興局による定点調査結果では、あきたこまちの生育は、県北(23地点)では、草丈64.6cm(平年比103%)、茎数584本/m²(同105%)、葉数11.1葉(平年差0.0葉)、葉緑素計値42.0(平年比101%)である。葉緑素計値は理想範囲内の地点が多いが、草丈が長く、茎数も多いことから、IV型のは場が多く見られる。

中央(11地点)は、草丈68.0cm(平年比106%)、茎数468本/m²(同96%)、葉数11.1葉(平年差±0.0葉)、葉緑素計値43.4(平年比107%)である。葉緑素計値が高く、生育指数は地点差が大きく、IV型が多い一方で、IまたはV-2型のは場が見られる。

県南(29地点)は、草丈66.8cm(平年比106%)、茎数519本/m²(同99%)、葉数11.2葉(平年差+0.3葉)、葉緑素計値45.3(平年比106%)である。葉緑素計値が高く、生育指数は多い傾向にあり、VI型が多く、V-1型のは場も見られる。

葉緑素計値が高い地点が多く、生育・栄養診断を確実にに行い、下表を参考に適正な減数分裂期の追肥を実施する。

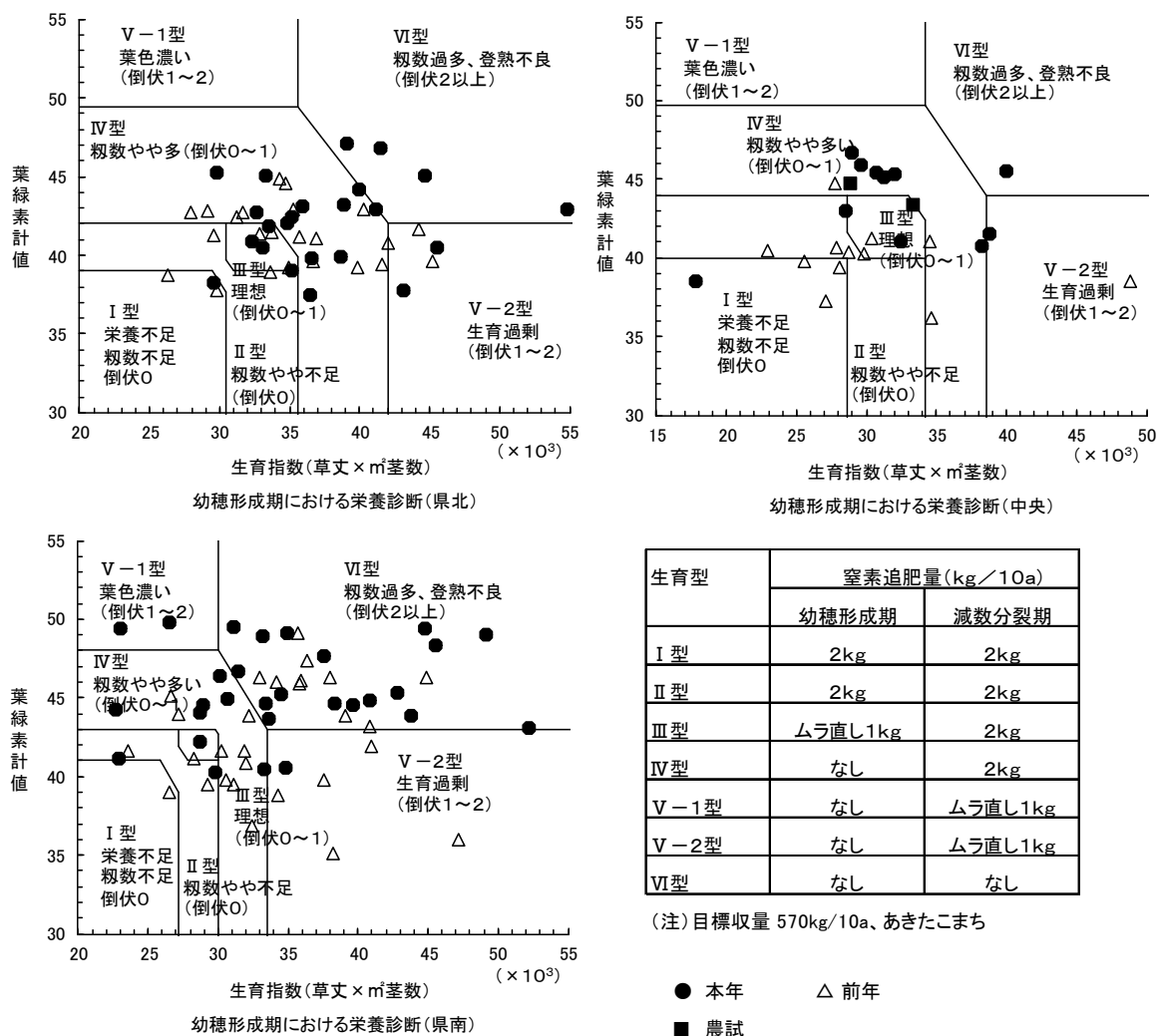
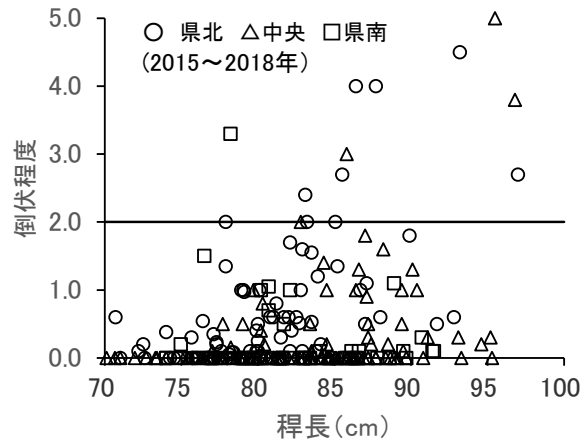


図-6 幼穂形成期頃の栄養診断 (稲作指導指針p.73~76)
(7月15日各地域振興局定点調査結果より)

2) 幼穂形成期の倒伏診断

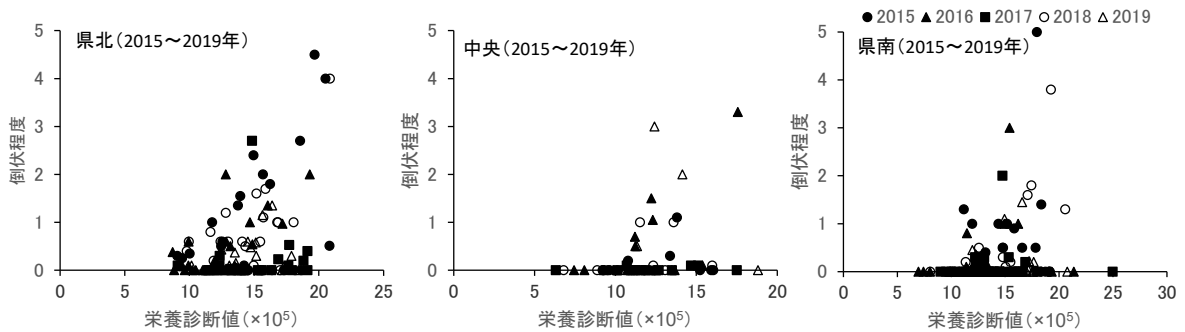
倒伏程度が2以上になると収量、品質に影響が現れる。稈長と倒伏程度は83cmを超えると倒伏程度2以上となる場合がみられる（図－7）。それぞれの地域の倒伏程度2以上となる場合の幼穂形成期の栄養診断値（草丈×m²茎数×葉緑素計値）は、県北が概ね12×10⁵以上、中央が概ね13.0×10⁵以上、県南が概ね14×10⁵以上である（図－8）。

特に、上記の栄養診断値を大きく超えるほ場では、倒伏軽減剤の使用を早めに検討する。



図－7 稈長と倒伏程度

(各地域振興局定点調査結果より)



図－8 幼穂形成期栄養診断値と倒伏程度（各地域振興局定点調査結果より）

(5) 減数分裂期（葉耳間長±0 cm頃）の窒素追肥

減数分裂期の目安は、止葉（n）とその前葉（n-1）の葉耳が重なる時期である。この時期は、出穂10～12日前頃に相当し、穂肥の適期である。幼穂形成期の栄養診断に基づき窒素追肥の判定を行う。

表－9 減数分裂期の地域別理想生育（稲作指導指針p. 74-75）

項目		理想生育量（あきたこまち、目標収量570kg/10a）		
		地域	県北 7/25	中央 7/25
草丈 (cm)	上限	74	72	75
	理想	72	70	74
	下限	69	69	72
茎数 (本/m ²)	上限	529	527	454
	理想	504	491	437
	下限	479	456	420
葉数	上限	12.2	12.2	12.5
	理想	12.0	11.9	12.3
	下限	11.8	11.7	12.1
葉緑素計値	上限	40	39	39
	理想	39	38	38
	下限	38	36	37
生育量 (×10 ³)	上限	38.4	37.0	33.5
	理想	36.2	34.6	32.1
	下限	33.9	32.2	30.8
栄養診断値 (×10 ⁵)	上限	15.0	14.2	13.0
	理想	14.0	13.1	12.3
	下限	13.0	11.9	11.7

(6) 水管理の要点

幼穂形成期に入ったら間断かん水が基本である。出穂当初は水を多く必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水状態にして水を切らさないように管理する。

1) 低温条件

日平均気温が20℃以下（最低気温17℃以下）の日が続き日照時間の少ない冷害気象条件下では、冷温感受性期間中に幼穂を水面下に保つことにより冷害を回避する。前歴深水かんがいは、幼穂形成期から減数分裂期直前まで（前歴期間）の期間に水深を10cm程度に保つことで、冷害防止効果が大きい技術である。減数分裂期（危険期）に低温が予想される場合、水深を15cm程度の深水に管理する。ただし、かんがい水温が気温より低い場合は逆効果になるので注意が必要である。

2) 高温条件

出穂後の20日間の平均気温が27℃（最低気温が23℃）を超える場合は、白粒等の発生による品質低下が懸念される。出穂期は浅水管理として、その後は間断かん水とするが、最高気温が30℃を超える場合は用水のかけ流しを実施するなど、出穂後の気象条件にあわせた水管理を心掛ける。

**実施！
徹底！**

湛水管理

カドミウムを稲に吸収させないために、
湛水管理は最も効果のある対策です。
7月中旬～8月下旬は湛水管理を必ず実施しましょう。

カドミウム濃度が**0.4ppm**を超える米を流通させると
食品衛生法違反となります。汚染米を生産しないように
水管理を徹底しましょう。

また、お米を消費者へ直接販売している方は、確実に
カドミウム濃度を分析し、安全な米を販売してください。

秋田県 農林水産部 水田総合利用課



湛水管理のポイント

- 6月下旬から中干しを開始し、強い中干しは避ける！
- むかりやすく、水はけが悪い水田では中干しの際に、溝切りを実施！
- 出穂前後各3週間は常時水を張り、田面に空気を触れさせない！
落水は遅めに！

～汚染米が発生すると～

基準値を超えた米は、**湛水管理の実施を条件**として、県が買入処理を行います。
ただし、同一生産者において、**汚染米が連続発生した場合、県の買入価格が減額**となります。

◎2年連続発生……………通常買入価格の1/2の価格

◎3年以上連続発生……………通常買入価格の1/3の価格

(例)通常買入価格が、5,700円/30kgの場合 2年連続発生……………2,850円/30kg
3年連続発生……………1,900円/30kg

※出荷の際は、一団のほ場別に、**150袋(30kg)以下で出荷**しましょう。

この印刷物は42,000部印刷し、半部減額は1部当たり1.83円です。 汚染米の買入価格

(お問い合わせ先) 秋田県農林水産部水田総合利用課・地域振興局農林部・市町村・JAへ

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

TEL 018-881-3330

作物部

内線(422・423・424)

生産環境部

内線(306・310)

秋田県病虫害防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方気象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点 統計チーム

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進班）

TEL 018-860-1786

園芸振興課（調整・普及班）

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は8月26日（水）の予定です】